伝統の境界を塗り替える

The traditional materials close to you

左官職人
奥田 信雄
Nobuo OKUDA / Plasterer

建築家
魚谷 繁礼
Shigenori UOYA / Architect

京都で京壁を復元し再現することを一筋に追い求めている奥田信雄氏。
同じく京都で建築作品を数多く手がけている魚谷繁礼氏。
二人のこだわりや考えに迫り、いかにして手を取り合い空間をつくりあげていくべきかについて伺う。

聞き手＝潮田 紘樹、千田 記可、得能 孝生、原 泉
2017.6.19　奥田左官工業所にて

―― 京壁を塗る

魚谷　奥田さんが左官と出会ったきっかけは何ですか。

奥田　小学校の低学年のときに左官屋が学校の給食センターの壁を塗っていて、たまたま一緒に壁を塗らせてもらったんです。そのときに「素質あるで」と言われ、左官に興味を持ち始めました。その言葉を信じて中学校を卒業してすぐ親方の弟子になり左官を始めたのですが、自分に素質があるとは感じませんでしたね。元から素質のある方もいますが、僕の場合はそうではありませんでした。必死に努力しましたね。

潮田　京都で暮らしていると町家や寺社などの伝統的建築で土壁をよく目にしますが、京壁とはどういったものなのですか。

奥田　京都で発展した土壁を京壁と言い、伝統的な工法を使って塗ります。なぜ京都で土壁が発展したかというと、一つは土壁の原料である良質な土が京都で採れたからです。例えば、ここの和室の壁には京錆土という土が使われていて、これも質の良い土です。もう一つは、美しさを追求した建物が御所を中心にたくさんあって、京都の人々の壁への美意識が高まったからですね。

原　関西には優れた土がたくさんあるのでしょうか。

奥田　そうですね。大阪でも天王寺土などといった良い土が採れます。それに比べて関東ではあまり優れた土は採れませんね。関東ロームの土の質感はあまり土壁に適していません。

魚谷　土壁は下地の出来によって仕上がりも変わってくると思うのですが、左官屋が下地もされるのですか。

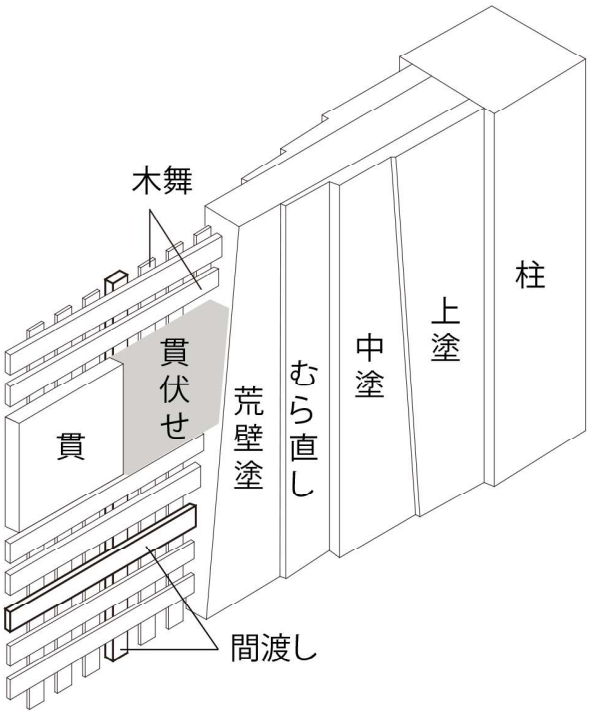
奥田　下地は大工がするときも左官屋がするときもあります。今では竹下地が多いですが、当初は藁を使っていました。しかし、藁ではどうしても強度が低いので、それを補強するために竹を編んで入れました。それが今の竹下地の原型になっています。海外の土壁には日干しレンガを下地に使っていますね。

魚谷　京都で土壁を使おうとする際、聚楽土（じゅらくつち）という土をよく耳にしますが、どのような土なのでしょうか。

奥田　聚楽土は日本で一番有名な土です。この土は鴨川が氾濫したときの堆積土であると言われていました。それを豊臣秀吉が気に入って、京都の御土居の外側に撥水剤として塗っていたと言う方もいます。でも、実際は九州の火山灰が風で京都に運ばれてきて堆積したものが聚楽土だという説が有力ですね。今では京都市西部の西陣地区で採れます。聚楽土がなぜそれほど有名になったかというと、他の土に比べて雨に強いからだと思います。土壁の最大の敵はやはり雨で、一般的な土壁は雨に打たれると流れてしまいます。それに対し、聚楽土などは雨に打たれても流されにくいのです。このように土壁の弱点を補っているという点が有名になった主な理由だと思いますね。また、色や風合いなどから利休が最も好んだ土でもあります。

京錆土を使った土壁

小間の茶室　撮影：奥田氏



土壁内部の仕組み

潮田　京壁は耐久性に優れているということですか。

奥田　僕はそのような丈夫な壁を目指していますね。京都の料理屋さんは清潔感を求め、20年ぐらいのスパンで壁を塗り替えたりします。しかし、小間という四畳半より狭い茶室の壁を塗ることが多いのですが、その壁は長い間塗り替えません。小間は味わいと趣を重視した空間で、お茶の世界では壁を大事に見るため、長い間丈夫な壁が塗られてきました。土壁は年月によってその趣が変化するもので、10年後、50年後、100年後で違う雰囲気を見せます。そのような趣の変化を見てもらうためにも丈夫な壁を塗ることに力を入れていますね。また、小間の壁は利休や尾形光琳などが考案した仕上げが施されていることも多く、昔からその時代の文化人による土壁に対する工夫がたくさんありました。

魚谷　奥田さんは自分の思う壁を塗るために道具にもこだわっていますよね。設計をしている人間とは道具に対する意識もまた違うと思います。左官屋にとって鏝は欠かせないものですよね。

奥田　一つ一つ塗る場所や塗り方に適した形をしていて、こだわりを持っています。京都で生まれた中首鏝（なかくびごて）という鏝があるのですが、定説では明治に入ってからモルタル工事をするために重心を考慮した結果出来たものだと言われています。しかし、江戸時代の終わりのごろの浮世絵に中首鏝が描かれているのです。これはつまり、明治に入る前にはすでに素晴らしい壁があり、単に経済性を追求しただけではなく、美しい壁を塗るための純粋な技術革新によって中首鏝が生まれたということだと思います。昔から左官屋は道具に対する意識が強かったのは確かですね。

―― 優れた素材がもたらす空間

原　私たち建築学生は設計演習の際に、素材について深く考えないことが多く、模型制作では白い材料を選びがちで素材へのこだわりがすごく薄いと感じます。大学では土壁などの素材に実際に触れて学ぶ機会が少ないからかもしれません。そういった現状に対してどう思われますか。

魚谷　建築家は材料に頼らずとも良い空間をつくれないといけないかもしれません。そういう意味では白模型は必ずしも悪くはないと思います。伝統的な素材や工法などに頼るとそれだけですばらしく見えて満足してしまいがちです。そのような材料が本当に自分の意図する空間に適しているのかを判断できることも大事です。

奥田　素材へのこだわりを持つためには、その違いをしっかり見極める目を養うことが一番大事だと思います。自然素材がすべてすばらしいということはありません。良いものもあれば悪いものもあります。空間ごとにどのような素材が適しているかを考えて実践することが大切です。その組み合わせによって意図しているような空間ができれば、その素材は自分の中で良いものとみなすことができます。そうした経験の積み重ねによって初めて素材へのこだわりを持つことができるのだと思います。

潮田　具体的にはどのようなこだわりをお持ちですか。

奥田　伝統的な土壁の空間を再現する際には、京都の土のの良さを残すように心がけていますね。聚楽土をはじめとする京都の土は糊を使わないことで雨に強い壁になります。このような仕上げを「水捏ね」仕上げと言い、私たちは一切糊を使用しない聚楽壁によって土そのものを活かした空間をつくります。また、共土（ともつち）での仕上げを頼まれることもあります。共土というのは荒壁の段階で使った土を中塗り、上塗りにも使用するときの土の呼び方です。同じ土をずっと使用することで土の本来の良さが生まれますね。

奥田氏がこだわりぬいた鏝

鏝が描かれている浮世絵

魚谷氏が手がけた御所西の宿群の和室。開口部によって自然の景色を切り取る。

魚谷　気が付けば最近では土壁や漆喰をよく壁の仕上げに使うようになりました。本当はクロス貼りなどたくさんの種類の仕上げがありますが、伝統的な仕上げを意識していなくても、木造の建築を考えているときは土壁か漆喰のどちらかを選んでいますね。

潮田　それらの仕上げはどのような空間を意図して使っているのですか。

魚谷　特に真壁の建築を設計する際に土壁をよく使います。町家改修の際もそうですが、真壁だとまず柱と梁という線材で空間が成り立っていて、そのうえで土壁を塗って面にする箇所を考える。これには近代建築にも通じるところがあるようで、面白さを感じています。土壁を塗らないところが開口部になるわけですが、目に入る木の柱と土壁とその外に広がる自然の風景との相性がとても良いように思います。

奥田　土壁には日本画の余白と同じ効果があるのだと思います。つまり、土壁は開口部から見える景色をより引き立てているのですね。

――　現代建築における土壁の可能性

潮田　現代では、真っ白な壁で仕上げている建築を目にすることが多いですが、白い壁と土壁に共通点はあると思いますか。

魚谷　現代建築においては、白い壁で抽象的に仕上げ、おさまりにおいてどれだけ線を少なくできるかが重視されることが多いですね。それにより、例えば開口部を大きくとって景色を見せながら、その開口部とその周囲の壁とが対立することなく調和するようにします。おそらく、それと同じようなことが真壁と土壁で構成される建築にもあるような気がします。

原　実際には土壁のどのようなところに現れているのでしょうか。

魚谷　『陰翳礼讃（いんえいらいさん）』[註1]のような話になりますが、明るい空間よりも暗い空間の方が魅力を放っていることがあります。そのような暗い空間をつくろうと思ったときに、塗装で暗い色を塗ると少しわざとらしい感じがしますが、土壁

奥田左官工業所にある試行錯誤を重ねたたくさんのサンプル

を使うと自然な仕上がりになります。白い空間をつくる際も、ペンキのローラーの跡があるよりは鏝の手の跡があったり少しムラがあったりする方が自然で味わいがあるのではないかと思います。土壁や漆喰を伝統的なものにとどめず、現代建築にも応用していけばもっと魅力的な空間ができるのではないでしょうか。

潮田　現代建築というと鉄筋コンクリート造や鉄骨造の建築を思い浮かべるのですが、木造以外の構造にも土壁を使うことはできるのですか。

奥田　今では鉄筋コンクリートでできた茶室などでよく見かけますが、実はそのような構造の方が丈夫な土壁ができるというメリットがあります。鉄筋コンクリートなどの構造では水分が多く籠って土が乾きにくくなります。乾きにくくなればなるほど丈夫な土壁ができるのです。しかし、乾くのに時間がかかればその分色上がりがよくありません。その仕事を早く仕上げなくてはならないときは扇風機や除湿器を使うこともあります。そこのバランスをコントロールするのが難しく、そのような構造体に土壁を塗るのは慣れが必要になりますね。

――　作品をつくり上げるために

潮田　今までで一番思い入れがあるのはどのような作品ですか。

奥田　実は宗教関係の建物が多いですね。そのような仕事は多くの信者さんの願いや思いがあります。なので、それにしっかり答えようと思うと、使いたい材料や実現させたい質感が頭に浮かんできます。それを実現できる機会にもなるからですね。

原　予算内に収めるために妥協されたことはありますか。

奥田　それはありません。妥協したら作品として成り立ちません。おかげで経済状況は良くないですね。でも、そのような問題を考えずに仕事をしようと意識しています。その方が集中できて最高の作品づくりに繋がっていると思います。集中できる環境があるかはやはり重要ですね。さらには、ある程度自分の技術を維持できるくらいに仕事をして、その中で反省する時間をしっかり設けて、次に臨むというのが一番良いですね。仕事をするたびに毎回反省会を

西都教会外観。上部の窓から礼拝堂に光を取り込む。

イタリアのスタッコを使用した礼拝堂内部

しています。帳面などに現場名や仕事内容などを全部残すようにしています。試行錯誤は欠かせません。

魚谷　僕は西都教会における光の計画に思い入れがありますね。礼拝堂からは窓が見えないのですが、光だけが入ってくるように設計しました。壁はツヤがあまり無いように見せながら、実は光をよく反射させるにはどのような素材を使えばよいか試行錯誤を重ねましたね。様々な漆喰を取り寄せて、設計意図に合った素材を選ぼうとしたのですが、漆喰の種類の多さに驚きました。

奥田　本当にたくさんありますよね。どのような漆喰をお選びになったのですか。

魚谷　そのときは、イタリアのスタッコ[註2]を使いました。大理石を含んでいて見た目はそれほどツヤがないけれど、一番理想的に光をよく反射していたので。実際、この教会の壁を横から見るとじんわり光を反射しているのがわかります。そして夕焼けのときはその壁どうしが夕日を繰り返し反射させ、堂全体がほのかに赤く染まります。このように素材の特性を十分に活かした設計をしようとサンプルをたくさん集めて選んでいますが、左官屋と協力して欲しい質感の仕上げを一緒につくったりしていけたら面白いですね。そうすると設計の幅も本当に広がりますね。

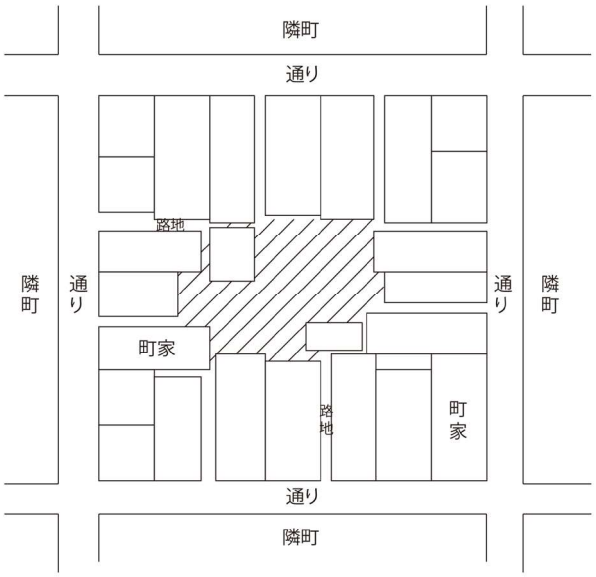
―― 京都の魅力

原　長い間京都で仕事をされていますが、京都の魅力はどこにあるとお考えですか。

魚谷　僕は碁盤目状に生成された街路街区に京都の魅力があると思っています。京都の街区は正方形や長方形の形をしていて、町家が通りに面して建てられたため、街区中央部には余った土地（右図斜線部参照）ができます。その土地を庭などに活用したり、街区の中央へのアプローチのために路地が挿入されました。このような土地をどう扱い、都市をどう良くしていけるかを考えた上で、建築をつくることにとてもやりがいを感じています。

奥田　僕が思う魅力は、町家の空間と京都の人々の色彩感覚です。京都の町家空間には人間が本来感じる安らぎがあるようです。というのも、人類の最初の安住の地はほら穴の中で、周囲を土で覆い動物に危害を加えられないようにしていました。土で囲われた洞窟の中は人間にある安らぎを与えていて、土壁で囲われた町家空間はその雰囲気と似ているのだと思いますね。また、そうした美しい空間で暮らすことで京都の人々は色彩感覚を磨き上げてきました。これも京都の魅力の一つで、壁の色や聚楽土の色、また伝統的な染色技術などの発展に繋がりました。

魚谷　そのような伝統的な技術をもった職人さんと仕事ができるのも京都の魅力に感じます。京都では自分が意図している空間に対して材料や職人、大工がしっかり応えてくれます。ずっと京都で仕事をしているとそれが普通に感じてなかなか気付かなかったりもするのですが、他の地域で仕事をしてみてはじめて実感することもあります。



京都のグリッド状の街区形成

奥田　その通りだと思います。でも、魚谷先生のような設計者の立場から職人や大工にしっかり仕事を任せていかないと、技術が衰えてしまい、そのような魅力は引き継がれません。

魚谷　確かにそうですね。今は良くてもいつまでこの魅力が続くかわかりません。重要文化財の修復やお茶の世界からの需要があってどうにか引き継がれている気もします。

――　技術を知る

潮田　様々な職業の方と関わることが多いと思いますが、技術を活かし魅力を伝えるために意識していることはありますか。

奥田　僕が最も大事だと思うことは、一つの仕事に関わっている職人さんが互いに配慮を欠かさないことです。設計者が図面に二寸五分の丸太の口径を描いたときに、寸法は合っていてもそれより細く見えるような柱をつくる大工もいます。お茶室の小間などは寸法よりも細く見える柱を使うからです。同じ寸法でも人や空間によって仕上がりは異なるということも計算に入れて工務店は大工を選ばないといけないと思います。工務店が職人の癖に配慮することも大切です。

魚谷　確かに設計者が職人を選ぶということはあまりないですね。僕も一緒に仕事をする左官屋さんのほとんどは工務店が選んだ方です。

奥田　昔は建築をつくっていく上で左官屋ももっと設計に関わっていたのですが、今は工務店が中心になっています。だから、左官屋としては与えられた費用の中で失敗のない仕事をしなければならないという状況でして、挑戦的で画期的な仕事というのはまず見られなくなりましたね。

原　一つの仕事を進めていく中で制約が多くなるほど思い通りの仕事をするのは難しいように感じます。

奥田　大工の仕事をいかに引き立てるかが左官屋に求められる役割の一つなのですが、実はここが私たちの仕事の一番難しいところだと感じています。大工は図面を見て設計者のつくりたいイメージを汲んで、それに沿って建築を組み立てていきます。要するに、大工がつくった建築をうまく活かすということが、設計者が考える空間をつくっていくことに繋がります。私たち左官屋が様々な要望を持って細部の設計にまで指示するようなことがあれば、その仕事が成り立たなくなります。僕は土壁をまっすぐ塗る技術を磨いてきましたが、自分の思うように塗れば良いということは決してないのです。設計者によっては少し丸みを帯びた壁を要求することもあります。それでもやはり、左官屋が口を出す前に、設計者の意図に沿って仕上げることが大事なのです。そのためにも大工の技術をいかに美しく、間違いのないように見せてあげるかということが私たちの最大のテーマだと思っています。

魚谷　自分の思うように塗ってくれと言われても左官屋からしたらそれはそれで困るわけですね。設計者は多分土壁をまっすぐ塗ることの苦労を知らずに、まっすぐなのは当たり前だと思っているところがあるかもしれません。だからこそ、そのような曲がった壁を要求し、奥田さんの持つ優れた技術をあまり理解できていないのかもしれません。漆も元は平滑にツヤを出す技術ですが、上手すぎるとラッカーのようになってしまうので、少しムラがあった方が手仕事っぽくて良いという人もいますね。

奥田　設計者が求めるような丸みの帯びた壁を塗っていたこともあったのですが、今では土壁をまっすぐムラなく塗る技術が一番大事だと思って日頃から努力していて、嬉しいことに同業者などからその技術を評価していただいています。今となっては、自分の中では、よりまっすぐに塗った壁こそが美しく大事であると確信しているので、その信念がぶれることはありません。設計者の意図を汲みながら

も自分の中で信念を持つことは大事だと思います。

魚谷　京都の左官屋が素晴らしい仕事をされているのは、そのような信念を持っているからでしょうね。他の地域では必ずしも京都のように上手く土壁や漆喰を塗ってくれるわけではありません。地域によっては土壁や漆喰を塗れる左官屋さんを工務店に探してもらうことから始めなければならないこともあります。

奥田　そうなってしまったのは、左官屋が少ないということもありますが、一番の要因は、左官屋のアピールができていないからだと思いますね。昔は家の壁の仕上げを左官屋にしてもらうことも珍しくなかったのですが、今では大半がクロス貼りで、左官屋が一般住宅の壁の仕上げを任されることがなくなってしまいました。そのような状況の中で、僕らも先輩方も左官屋の技術をアピールしてきませんでした。これが大きな要因ですね。京都以外の地域では土壁というと土が塗ってあれば良いのですが、京都では土壁の質を求められるので左官屋個人の本来の技術が試されます。だから、京都では他の職人よりいかに自分が優れているかを示すことに努力を費やしてきました。切磋琢磨する環境が京都の土壁の技術進歩につながったのかもしれませんね。ある意味恵まれた京都の環境で向上した技術を認知してもらうためにも自分を示すということが大切です。左官屋を理解していただけるかは、いかに自分の技術に自信を持ちそれを示すことができるかにかかっています。

――　自分を持つ

潮田　今後、我々学生が設計を考えていく際、大事なことは何だと思いますか。

魚谷　建築は材料があって初めて出来上がるものなので当然材料を知らないと設計できないのですが、難しいことは実務をしながら覚えていったら良いのかもしれません。それよりも、そういった伝統的な材料や技術によりつくられた空間に数多く触れることが大事だと思います。幸いそのような建築が京都にはたくさんあります。

奥田　職人になる人は頑固であるべきだと思います。僕がやってきたことは、最も優れた性能を有した明治末期の土壁を京壁のスタイルとして復元し、再現することです。何か新しいものを編み出す力がとても大事な仕事をしていながら、そのような創造性は僕に欠けていました。それでも左官を 50 年続けることができたのは、強い気持ちがあったからだと思います。自分の信念を曲げないでほしいです。

――　左官屋と建築家のこれから

原　左官屋と建築家という職業の今後について、お互いどのような期待をされていますか。

奥田　僕は京都で左官屋をしているからこそ、京壁の基本をもっと勉強したいと考えている全国の左官屋のために、勉強の場を提供することを怠ってはいけないと思っています。土に使われる防腐剤の変化や藁の変化や、それによる土壁の味わいをしっかり勉強できる場を設けることが、京都で京壁を塗っている我々の役割だと思います。土壁を勉強するのなら京都に来ていただきたいですね。

魚谷　今後そのように左官という職業が広く認知されていくためにも、まずはそのような技術を将来にわたって残していく必要があります。しかし、ただ残すといってもその残し方が重要です。伝統的な技術は今では特殊なものと考えられていますが、現在僕が使っている土壁や漆喰などは身近なもののように感じています。特殊なものとしてではなく、もう少し当たり前のものとして認識されて残っていってほしいですね。そういった伝統的なものを残していく上で、奥田さんのようなトップランナーの方は絶対に必要だと思います。だからといって、左官の世界を敷居の高

いものとするのではなく、むしろ誰もが気軽に楽しめるものであっても良いのではないでしょうか。トップを走り伝統を守り抜いている世界と、気軽に楽しんで土壁を塗る世界とが上手く繋がればすばらしいと思っています。例えば、サッカーではＪリーグのようなプロの世界がありますが、子どもたちが遊びとして楽しむこともできます。このように、特殊な世界ではなく、誰でも楽しむことができる世界があって、奥田さんにはその中でのトップランナーでいてほしいですね。そして、ただ昔の技術を残すだけではなく、新しい技術を皆と一緒に築き上げていく存在であってほしいと思います。

潮田　我々学生としても、やはり伝統的なものに関わるのは緊張しますし、敷居が高いと感じます。そのような伝統的な世界を当たり前のものとして残していくために、建築家が果たすべき役割はあるでしょうか。

魚谷　僕も敷居が高いと思っていました。しかし、実はそうでもないのかもしれません。設計者は敷居が高いと言わずに、もっとそういった伝統的な世界に触れたら良いのかもしれないですね。そして興味を持てばもっと勉強すればいい。それは建築家に限らず君たち学生にも言えることだと思います。伝統技術の世界では勉強不足だと門前払いされるような雰囲気が漂っていて、それが少なからず現代の若い人を伝統嫌いにさせている要因だと思います。難しいことはよく分からないけれど、とりあえずやってみようと思えると良いですね。

奥田　そのためには、今後の後進の育成にも気を配らないといけないと思いますね。実は左官業界の中でも半年で一人前の左官屋として世の中へ送り出そうという動きがあります。そのような考えもあると思いますが、一人前の職人になるには最低 15 年はかかります。さらに良い評価をもらうためには 20 年は努力しないといけないと思います。そのような修行に耐えることができる我慢強さがあるかないかを判断していくことは大事ですね。同じ職人を育てるという意味でも左官屋と建築家は全然違いますね。僕がよく知っている工務店では最初の５年間は掃除ばっかりするらしいです。しかし、その間に大工が仕事をしているのを自分で見て勉強するんですね。技術を一から教えるのではなく、職人がどのように仕事に取り組んでいるのかを見て勉強することがものづくりの世界の中で大事なことでもあります。

原　職人の世界ではやはり厳しい修行の期間は必要ですよね。そのような修行を重ねて左官屋は技術を身につけると思いますが、その技術を活かすためにも建築家はどうあるべきでしょうか。

奥田　私たち左官屋の仕事を正当に評価してくださる方が増えることを期待しますね。そのような方と一緒に仕事をしているとやりがいがあります。

魚谷　僕が左官屋の仕事を正当に評価をするためには、まだ経験不足ですね。僕が仕事を始めてすぐの頃は、もろもろの都合でクロスしか使えなかったり、自分でペンキを塗ったりしていたこともありました。そこから塗装が使えるようになって、最近になってようやく漆喰や土壁をという選択肢を知った。それでようやく漆喰や土壁にも様々な種類があることが分かってきました。そうなるといつかは奥田さんのような技術を持った方に仕事をしてもらいたいと思いますし、単に依頼するだけではなく、自分のつくりたい壁のイメージをしっかり共有してもらって塗ってもらえるようになりたいと思いますね。こういった様々な段階を楽しめるのも京都で仕事をすることの面白さだと感じています。

奥田　そうですよね。町家の改修現場などをよく見かけますが、土壁ではなくペンキなどで仕上げていることもあります。あまり良いとは思えないですね。やはり土壁の文化を勉強してそれを考慮して改修するべきだと思います。それに対し、私たち左官屋も常に舞台に上がって仕事をしていて、全て見られているという意識を持って取り組まないといけません。そういった意識のもとで丁寧に仕事をして、

お客さんにその丁寧さを理解していただけるようにアピールしないと評価につながりません。職人ではなく、ある意味営業マンにならないといけないときもありますね。

魚谷　自分の仕事の良さをわかっていただくことが必要なのは建築家も職人さんも皆同じですね。伝統技術に関しては、今では自分の仕事の良さをしっかり伝えている人があまりいなくて、古い物が良い、自然素材だから良い、というような思考停止したような魅力の伝え方になってしまっているように感じます。そうではなくて、伝統とか自然とかに頼らず、純粋にものそのものの良さをアピールしてもいいのではないかと思います。

奥田　その通りですね。一番の理想は、魚谷先生のような立場の方に、仕事をしている中で職人を発掘していただいて、その方を表舞台へ上げていただくことだと思います。若くて熱心な方はたくさんいますのでそういった方に仕事の機会を与えていただきたいですね。現場で優秀な技術者や優れた材料がどんどん少なくなっている現状では、それが必要不可欠だと感じます。また、建築家の人には怖がらずにもっと土壁を使っていただいて、様々な職人を見てほしいです。そして土壁が過去の仕事にならないように我々左官屋も努力していきたいと思います。

潮田　左官屋と建築家がお互いにどのように手を取り合うべきか、そして今後どのような将来を思い描いているかを聞くことができ、とても興味深かったです。ありがとうございました。

1）小説家、谷崎潤一郎の随筆。可能な限り部屋の中を明るくしていた西洋の文化に対して、日本ではむしろ陰翳を認め、その中でこそ、日本の美意識、美学が現れ、芸術が生み出されると主張した。

2）化粧しっくいとも呼ばれる、骨材、結合材、水からなる建築材料で、壁や天井の表面仕上げとして塗ったり、装飾としても使う。基本的に屋内に使うものを漆喰（プラスター）、屋外に使うものを化粧しっくい（スタッコ）と呼ぶ。